

稲 山 会 通 信

第43号

2021年6月1日発行

発行人：行方正幸 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998



新緑の上高地：行方正幸 08 撮影

巻頭言：La vie est belle (ラ ヴィ エ ベル)

— 人生はすばらしい — 稲門山の会副代表 常数英昭(S49 年卒)

山に登るきっかけは人によって様々であるが、東京付近の小中学校の場合、遠足で近郊の山に行くことが多いと思う。私自身は、遠足で高尾山、奥多摩御岳山、筑波山、鋸山、夏期林間学校で箱根仙石原から乙女峠を経由して金時山を登った。クラスメートと前後しながら山道を歩くのが楽しかった。1960(昭和35)年、小学4年時高尾山に行ったときは高尾駅がまだ浅川駅の名称であった。



また、父がハイキングに連れて行ってくれた。伊豆大室山、三浦半島鷹取山、鎌倉六国峠、陣馬山、榛名山、妙義山、神津牧場・物見山などである。中1の1963(昭和38)年11月23日「勤労感謝の日」に三浦半島大楠山に行った。楽しみで早朝に起きて何気なくTVをつけた。その日は初の日米TV宇宙中継の日だったが、伝えられたのは「ケネディ大統領暗殺」のニュースであった。大楠山の頂上広場からは三浦半島のパノラマとその先の青い海が見えた。秋空は澄んで草原が風になびいていた。静かで、人間社会の争いなどのできごととはどこか別世界のことにも思えた。

中3の1965(昭和40)年5月のゴールデンウィークには父と南アルプス夜叉神峠に行った。乗り合いのジープを降りて登って行き、道を曲がった瞬間に白根三山の白銀の連なりが目に飛び込んできた。北岳山頂は歩けばすぐ行ける近さに見えた。鳳凰三山の方に少し歩くと登山者が「この先は運動靴では無理だよ」と教えてくれた。いつかあのピークに立ちたいと思った。

高校ではワンダーフォーゲル部に入った。1966（昭和 41）年、高 1 の夏山合宿は山形県朝日連峰に行った。初めてのテント泊、行く前は買ったシュラフで畳の上で寝た。歩き通して下山して、バスが来るところまで、皆でトラックの荷台に乗って行った。夏の太陽が輝いて誰もが笑顔だった。

荷台で風に吹かれて「生きてるってすばらしいな」と思った。

高 2 の 1967（昭和 42）年 7 月、ワングルの友人と 3 人で表銀座から槍ヶ岳に登った。2 日目の朝、燕山荘前のテント場から槍ヶ岳が見えて感激した。快晴の稜線を歩いて大天井岳を過ぎる頃からガスが出てきて、水俣乗越から槍沢に降りて幕営した。翌日槍ヶ岳に登頂して中岳を通過して南岳への分岐から天狗原（氷河公園）に下って泊まり、4 日目に上高地に降りた。夜行で帰京すると、その日の前後 8 月 1 日に西穂高岳稜線で松本深志高校の集団登山パーティーが落雷で遭難したことを知って驚いた。またこの年に公開された映画ガストン・レビューファ「天と地の間に」を見てその清澄な世界にあこがれた。

早稲田ではワングル部先輩の中村牧生さんが入部されていた山の会に入った。入部 2 年目、1972（昭和 47）年の夏合宿は南アルプス縦走をした。初めて北岳ピークに立った。合宿を終えて静岡駅近くで食べたチーズハンバーグ定食が美味だった。同年 10 月に同期の坂本さん、1 期下の小竹さんと遠見尾根～五竜岳～唐松岳～樺平～劔沢～劔岳ピストン～内蔵助平～黒 4 ダムの山行をした。紅葉の盛りで仙人池から見る劔八ツ峰はヨーロッパアルプスを思わせた。山行は天気にも恵まれて楽しい思い出に残っている。劔沢で泊まった 10 月 9 日はジャコビニ流星群が見られるとされた日でテントを度々出たが流星群は見えなかった。この日のことはユーミンが「ジャコビニ彗星の日」という曲にしている。

早稲田を卒業してからも山には時々行っていた。1980（昭和 55）年に中公文庫で発行された近藤等（早大教授）著「アルプスの空の下で」を愛読した。シャモニを拠点にして、レビューファやアンドレ・コンタミヌ、その他のアルピニストとザイルパートナーを組んでのヨーロッパアルプスの岩壁、岩稜の登攀記である。悲壮感はなくあこがれのルートを登る喜びが綴られている。＜あこがれから人生最大の喜びは生まれる＞のだ。つねに心にあこがれを抱きつづけるのだ、と著者は言う。同書解説の大森久雄によると、夏にシャモニの著者から届く絵はがきは＜La vie est belle＞人生はすばらしい、と結ばれていたとのことである。

今、稲門山の会役員を務めさせて頂いて、1957（昭和 32）年から続く「山の会」の伝統をリレーしていきたいと思う。OB・OG 先輩の方々にはいつまでもお元気でご活躍して頂きたいし、働き盛りの OB・OG の会員の方々は社会の中核を担いつつワークライフバランスを大事にしてください、現役学生の皆さんには学業とともにセーフティーファーストで山に登ってほしい。私自身、現役時代とともに山に登った同時代の役員の皆さんと 40 年のときを隔てて活動することに喜びを感じる。OB・OG の方、現役学生の皆さん、ご要望がありましたらお伝えください。コロナ渦の中、皆様健康に留意されてまた元気で会いましょう。

【山の会で利用できる山小屋】

(1) 日本山岳会上高地山岳研究所

- ・所在地：〒390-1516 長野県松本市安曇上高地
- ・管理：公益社団法人日本山岳会 現地管理人：1 名

(2) NPO 法人千露里庵倶楽部（八ヶ岳・甲斐大泉）

- ・所在地：山梨県北杜市大泉町西井出 7047 番地 2
- ・代表者氏名：間瀬良一



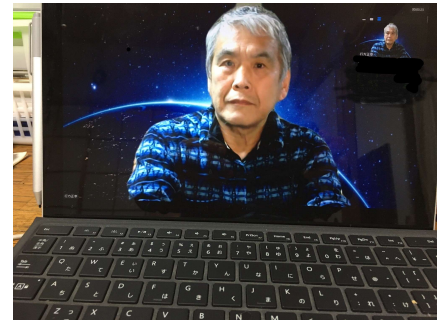
※ 日本山岳会の「山研」を利用したい方は 行方 yukemnamekata@gmail.com に問い合わせ願います。

【特集Ⅰ．2021年稲門山の会オンライン総会の報告】

2021年2月7日(月)10:00～11:30まで、稲門山の会(OB)役員11名と早稲田大学山の会(現役)役員5名の合計16名で、オンラインによる総会を開催した。

1月7日に新型コロナウイルスの「緊急事態宣言」が発令され、3月まで延長となり、早稲田大学や校友会から多数集合する活動の中止・延期要請もあり、2月7日にリーガロイヤルホテルで予定していた総会をオンライン総会に切り替えた。

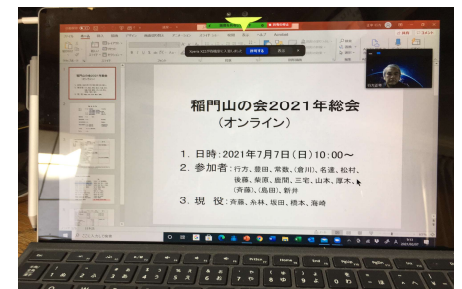
行方代表



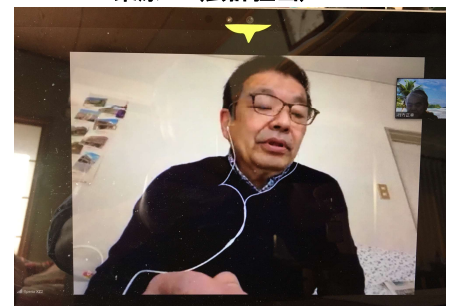
(1) 2021年総会の概要

行方代表より第1号議案(事業報告)及び第3号議案(役員と担当の変更)の説明があり、後述のとおり承認された。第3号議案については、副代表の豊田紳二OBが退任し、新たに新役員として厚木紗里OGがHP担当役員に就任した。その他担当業務の変更は次のとおりである。

代 表 行方正幸 (S50年卒) 稲山会通信担当
副代表 常数英昭 (S49年卒) 総務・コーチ会担当
副代表 倉川秀明 (S51年卒) 総務・コーチ会担当
名達一彦 (S50年卒) 事務局長・総務担当
松村幹雄 (S48年卒) 行事担当
後藤洋一郎 (S49年卒) コーチ会担当
柴原 至 (S52年卒) 会計・行事担当
鹿間行喜 (S52年卒) 総務・行事担当
三宅辰幸 (S52年卒) 総務・会計担当
山本達也 (H17年卒) 現役担当
厚木紗里 (H31年卒) HP担当
新井昭夫 (S46年卒) 顧問
豊田紳二 (S47年卒) 顧問



柴原OB(会計担当)



名達事務局長



続いて柴原OB(会計担当)から第2号議案(会計報告)について説明があった。また、2月1日時点の会費納入者は74人で昨年より40人少ない。昨年は新年会の時に納入する会員も多かった。会費の未納は活動の根幹に関わる問題なので、未納入の会員に機会あるごとにお問い合わせすると説明があった。

【ゆうちょ銀行内の振替…振込口座番号:00100-2-333067:稲門山の会】

【他行からの振込…ゆうちょ銀行+店番号018+普通預金5130715:稲門山の会】

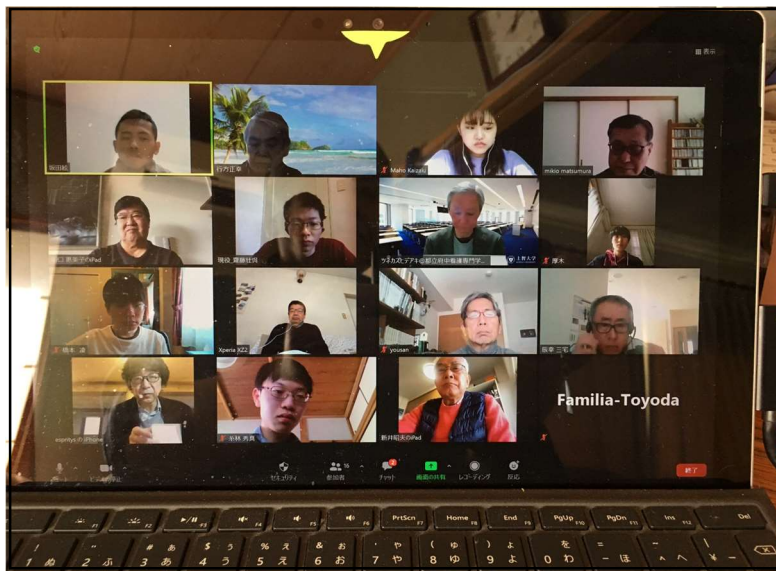
次に、名達事務局長から議案の文書裁決について、次のとおり報告があった。

第1号議案 賛成72 反対0 保留1

第2号議案 賛成73 反対0

第3号議案 賛成72 反対0
保留の意見は、日本山岳会の入会について「過去同様の目的で東京都岳連に加入したが、うやむやの内に退会した。趣旨は良いが過去の検証をしないと入会が無駄になる」というもの。

これについて、行方代表から山の会の加入が無駄にならないようみていく旨発言があった。



(2) 新旧役員交代の挨拶

【厚木 OG】5年前の山の会の幹事長で社会人2年目。パソコンは苦手で苦戦しているが、ホームページ担当役員なので島田 OB の指導を受けながらきちんと引き継いでいく。また、今の現役はあまり知らないけど頑張ります。

【豊田 OB】以前から70歳になったら公職は辞めようと思っていた。今年スペインに移住するはずだったがコロナで中止となった。若い人たちには上下関係なんか気にしないでやりたい山をやって欲しい。

厚木 OG



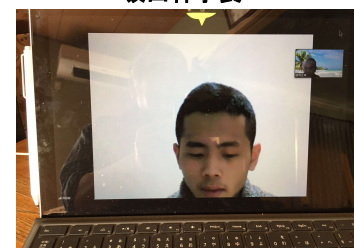
豊田 OB



齋藤前副幹事長



坂田幹事長



(3) 現役の活動報告

【齋藤壮呉前副幹事長】昨年は10月に山の活動が再開できた。それまでは、講習会をオンラインでやったり、OBとの知識の共有ができたのは良かった。今年の新人は8人で、まだ会としての登山活動はできていないが、個人的にジムの壁登りやハイキングに行っている。10月15日に新歓で奥多摩に行き、それ以降も毎月新人を連れて個人山行に行っている。

【坂田紘新幹事長】いま対面での活動ができないので、週に1回オンラインミーティングをやっている。コロナで学生課から3月までもサークル活動をしないように要請があるので、4月の新歓から活動を始める。新人のため夏合宿は是非やりたい。

(4) 意見交換

- 山の会の活動を写真や記録で残して欲しい。稲門山の会 (OB) として、遭難やコロナ対策で十分に謳歌することのできなかった現役の活動を暖かい眼で応援してきたいと思う。(OB)
- 雪山へ行く場合どのような装備と技術が必要か、また先輩の武勇伝なんかも聞きたい。(現役)

- ・コロナが収束したら夏にキャンプや暑気払いなど OB・現役が交流できる場を持ちたい。(OB)
- ・雪山に行くときは安全第一で行って欲しい。遭難や雪山などの登山技術の継承がこの2年くらいできていない。OBの高齢化で技術指導が困難になっており、役員の若返りが必要だ。(OB)
- ・現役の遭難対策や雪山技術の向上は日本山岳会 Youth Club の講習会を検討してみる。(OB)
- ・山へ行くときは、安全上も仲間がどんな人間か知っておくことが大事だ。昔は長い夏合宿などがあり、自然とお互いを知ることができた。それが一生の友達となる。(OB)
- ・海外遠征のときの外国語の取得はどのようにしたのか？ (現役)
- ・豊田 OB からヒマラヤとアンデス遠征のとき現地でスペイン語をマスターした。今でも毎日 NHK の英会話を1時間勉強してる。(OB)
- ・最後に常数副代表がメの挨拶で、学生時代の1972年に同期と一期下の会員と劔沢で流星群を観測した思い出を語り、オンライン総会は閉会となった。

(5) 2020年度会計報告書

2020年1月1日～12月31日

単位：円

項 目	収 入	支 出	残 高	備 考
前期からの繰越金(預金・現金計)			3,021,589	
年会費(振込分)	300,000			4,000円×75名
年会費(新年会時入金分)	164,000			4,000円×41名
新年会会費	270,000			6,000円×45名
預金受取利息	82			
収入合計	734,082			
新年会費用		414,700		大隈会館へ支払い
稲山会通信41号発行費		25,480		
プリンターのカラーインク代		6,048		
銀行振込手数料		1,980		
役員会資料コピー代		3,130		
役員会会議室代		4,880		
事務局費用		100,000		新年会案内、稲山会通信等発送費
ホームページ管理費用		43,740		
支出合計		599,958		
収支合計	734,082	599,958	134,124	
項目別預金残高内訳書				
一般会計：ゆうちょ銀行口座			80,105	通帳残高額を確認済
年会費入金振替郵便口座			191,432	通帳残高額を確認済
みずほ銀行普通預金口座			1,025,601	通帳残高額を確認済
特別会計：遭難対策費(ゆうちょ銀行定期預金)			843,000	通帳残高額を確認済
遭難対策費(みずほ銀行定期預金)			1,015,575	通帳残高額を確認済
合計			3,155,713	

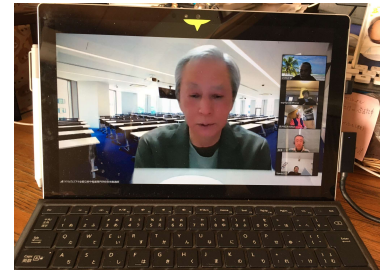
上記の会計報告を致します

会計幹事 新井昭夫

(代表が銀行通帳残高書と照合確認済み)



べの挨拶する常数副代表



来年はまた新年会・
総会で会いましょう

会員近況報告

— 2021 年総会の「返信はがき」より —

◆清水正昭(S33) 会の創立とその基礎固めに尽力した仲間たちは一、二を残して皆逝ってしまいました。「席を空けて待ってるぞー」という声には「そのうち行くからきれいにしとけよー」と返事をすることにしています。共に登った山々を眺める時、そこには寂寥感だけが漂っています。

◆上田訓央(S33) いつもご苦労様です。見事なまでのステイ・ホームです。家から一歩も出ない日も有り、読書も半端でない量になりそう。皆様身体には気を付けてください。

◆小島閑(S35) まあ、なんとか元気になっています。ご苦労さまです。今年もどうぞよろしく。

◆上田敦子(S34) 稲山会通信、バラエティー豊かで楽しく読ませていただきました。ありがとうございました。コロナ禍のもと、活動や講座出席もままならず、それなりに感染対策をして元気に過ごしております。倉川さん、短歌新人賞お目出とうございます。これからのご活躍お祈り申しあげます。

◆新川浩司(S36) ご苦労様です。会費、本日振込みました。コロナに罹らぬよう、蟄居しています。83 才。

◆清水保宏(S36) 何かとたいへんですね。今年もよろしくお願いします。

◆廣瀬舜一(S38) 人生百才時代、男子 82 才の平均寿命を心と身そして頭脳の健康の 3 拍子揃って突破しました。これからも社会のお役に立つよう全力で頑張っってゆく覚悟を固めています。

◆山本貴次(S36) 役員の皆様、ご苦労様です。今年もよろしくお願いします。コロナ禍の中、無事が一番と頑張っています。

◆加納孝治(S37) 新旧役員各位、ご苦労様です。コロナ禍・下ですが、会の運営よろしく願います。

◆東正躬(S37) 御苦労様です。宜しく御願ひ致します。

◆高尾勝彦(S37) なんとか元気にすごしていますが、山歩きはとんとごぶさたです。毎日、横須賀の海岸を 1 時間ほど歩いています。

◆金子弘吉(S37) 幸いなことに、特に異常はありません。

◆内藤錦樹(S37) 年相応に元気になっています。

◆古林美穂子(S38) お世話さまになります。明るい一年になりますように！

◆小久保雅代(S38) 稲山会通信、いつも楽しみにしています。

◆松村啓之亮(S38) 行方代表はじめ新しい役員会の皆様、よろしくお願い致します。山でも町でも決して無理も油断もしないよう願っています。

◆白倉俊夫(S38) 役員の皆様、コロナ禍の中ご苦労さまです。

◆平賀守(S38) 元気ですよ。御苦労様です。

◆秤勤(S39) 何故か体重減少、現在 47kg(現役時代 65kg)。一日小 1 時間の散歩がやっと。なぜか元気。家内を介助中。

◆藤井榮二(S39) 会報等送付ありがとうございました。

◆中込治文(S39) 最近は趣味の木彫を楽しんでいます。 ◆鈴木明人(S40) 元気にスキー行をしております。かぐらスキー場田代エリアは初級者にやさしい斜面が多く楽しめます。 ◆高野光正(S40) 稲山会通信送付いただきありがとうございます。内容が充実しており、読んだ後には感動しております。作成に携わる役員の方に感謝致します。私は高山植物が咲く頃に熊野岳のコマクサを観るために登っています。 ◆山崎征彦(S40) コロナ禍でもリモートと自粛のないシルバー人材センターの仕事を相変わらず続けています。お蔭様で体調は何とか維持していますが、アルコール不足による精神状態に異変が来そうです。 ◆松村葉子(S40) 元気で毎日平坦な道をひたすら歩いております。役員の皆さまお世話様です。今後ともよろしくお願い致します。 ◆斉藤雄二(S41) 昨年5月に大腿骨頸部を骨折し、現在引き続きリハビリ中ですが、スポーツジムでのコロナが心配です。ゴルフが出来るかな？ 山は無理です。 ◆久富征夫(S43) 現役でアフリカに参加したのですが、その後ずい分海外に行っているのですね。若いころがなつかしいです。 ◆佐久間正昭(S43) 役員の顔触れ、通信の記事等を見ると、世代の移り変わりを感じます。コラム欄の廣瀬先輩スゴイですね。富士山峰入りはご一緒しました。9月、熊野古道・伊勢路を伊勢神宮から熊野三山迄を妻と二人で歩きました。たかがと甘く見ていたのですが、峠をいくつも越える正に“古道”。意外と手強かったです。 ◆上原敏行(S43) 昨年1月より前立腺ガン(高リスク転移性ホルモン療法感受性前立腺ガン)にかかってしまい、山はもう無理かもしれません。 ◆太郎良博(S43) 通信第42号、なかなか充実した内容で素晴らしい出来映えです。出来るだけ山に出掛けるようにしています。昨年は、低山も含め20数回山に行きました。コロナ、何するものぞ！ ◆丹治和男(S44) たいしたことはありませんが、病院がよいの年明けです。 ◆島田弘康(S46) 昨年はコロナ禍で全ての計画がキャンセルされた1年でした。山も海(ダイビング)もほとんど行けなかったのですが、テニスだけは細々と続けています。今年はコロナ禍も終息して自由な活動がしたいですね。 ◆新井昭夫(S46) カメラを持っでの散歩を楽しんでいます。 ◆福田榮一(S46) 稲山会通信の「COLUMN」を読んで、思うところ多々ありました。これからも益々の充実した内容を楽しみにしております。体力維持の為テニスを続けていましたが、右ヒザを怪我し、現在療養中です。春のハイキングまでに完治できるよう療養に励んでいます。(この機に俳句を嗜んでいます) ◆西山一夫(S49) 昨年はがまん的一年でした。今年は山に行けますかね？ ◆鈴木良一(S49) 役員の皆様に感謝です！！ 古希を迎えて、安全な山歩きにより心掛けるようになりました。 ◆常数英昭(S49) 稲門山の会の役員として、会員相互の交流、現役山の会会員との意思疎通、事故防止に努めていきたいと思えます。都立看護専門学校、上智社会福祉専門学校の非常勤講師として社会福祉・社会保障を講義しています。 ◆後藤洋一郎(S49) 11月中旬から山行計画をキャンセルして巣ごもり状態です。 ◆小竹正雄(S51) 「稲山会通信(第42号)」、楽しく読ませていただきました。現役時代に接した筆者の方々の達意の文章に、山行を重ねた当時の若々しいエネルギーが体に蘇る思いとともに、過ぎ去りし日々の長・短、軽・重に感慨を禁じ得ませんでした。また、行方兄による“編集後記”から、細身だった高野氏の面影と数十年前に突然自宅にかかってきた電話の声を思い出しました。改めて御冥福をお祈りします。合掌。 ◆調昭雄(S51) 「しらべ鍼灸院」、開業3年目に入りました。首、肩、腰などの「痛み」何とかします。 ◆米山不器(S54) 元気です。会社顧問と投資中心の生活です。 ◆秋元容子(H27) To: 厚木ちゃん HP 担当頑張ってください！！

文責：名達一彦

【特集Ⅱ：槍ヶ岳・穂高連峰】



佐久平からの穂高連峰：斉藤雄二 OB 撮影

(1) 槍・穂高連峰の思い出

小竹正雄 (S51 年卒)

投稿を依頼されてとりあえず押入れの段ボール箱や机の引出しをひっくり返し、往時の山行企画書・写真・地図等を取り出してみたものの、散逸が著しく我ながらがっかりしました。既に半世紀近くを過ぎ、加えて古希が間近になり記憶力も覚束無くなっている私ですが、ともかくも思い出すままに記させていただきます。



①「孤高の人」

“槍・穂高”でまず脳裏に浮かんだのが何故か、新田次郎著「孤高の人」でした。大正から昭和初期にかけて社会人登山家として活躍した加藤文太郎の生涯をモデルにした小説で、加藤は“単独行”で名を馳せ厳冬の北鎌尾根で消息を絶っています。遭難したときは単独行ではなく二人パーティでした。(享年 31 歳)

本棚から埃をかぶっている上・下二巻本を開いて奥付を見ると、「昭和四十四年十月十五日五刷」、高校三年の時です。単独行、山々を疾風のごとく踏破、厳冬期の遭難死など強烈な意志と個性、劇的な生涯に引き付けられたのだと思います。

家探しした際には、山岳記録映画の上映パンフレットも出てきました。1972 年 6 月、上映作品はガストン・レビュファの「天と地の間に」とリオネル・トレイを描いた「悲劇のアルピニスト」です。当時の世界第一級のアルピニストの名前は今でも記憶の片隅に残っています。

1970 年 5 月に日本人がエベレストに初登頂(松浦輝夫氏、植村直己氏)を果たすなど“登山”が社会的にもインパクトを与える社会情勢があり、今振り返ると私も“登山”や“登山家”に憧れや夢を抱いていたのだなあとの感を深くします。

冬の涸沢岳西尾根より槍ヶ岳



②積雪期

冬山山行は何時も入山時には心に重たい、身の引き締まる思いを抱きつつ、下山時の解放感と安ど感には

ひと際大きなものがあり、冬山の魅力はこれではなかったかと思っています。

私の初めての冬山は、1973年2月の「涸沢岳西尾根（サポート隊：原さん、鈴木さん、坂本さん、小竹）」でした。中崎尾根～槍ヶ岳～涸沢岳～奥穂高岳の縦走隊（5名）をサポートするため、新穂高温泉から入山。森林限界付近に TENT を張り、好天の中を冬の滝谷や奥穂・北穂を眼前にしながら穂高山荘（奥穂高岳（？））まで登ったこと、TENT 内が寒かったことが記憶に残っています。

TENT で待機するも縦走隊と予定の日までに連絡が取れず、事故が起こったのでは…と不安と焦燥感に駆られながら鈴木さんと私が新穂高温泉まで下山し、在京連絡人に電話すると“キレットで一人滝谷側に滑落、自力で脱出し、縦走隊は上高地に下山した”とのこと。それまでの心配が一気に晴れ、心ゆくまでお湯に浸かった記憶がよみがえってきます。翌日、原さん、坂本さんと合流し、事態がよく呑み込めない中でともかくも縦走隊の無事を喜んだのでした。

次に「槍・穂高」ではありませんが、強く印象に残っている冬山に1973年12月の「上高地～長堀尾根～蝶が岳～常念岳～燕岳（予定）」があります。

OB 3 名を含め総勢 13 名のパーティ。冬の上高地は初めての私。沢渡でタクシーを降り重いキスリングを背負って山行を開始。暗くゆるい傾斜の釜トンネルを足元に注意を払いながら抜け、トンネル出口の雪崩の恐れがある沢沿いを数名ずつ分かれて足早に通過し、上高地帝国ホテル冬季小屋で入山手続。ストーブの暖かさと漬物で一息ついて幕営地の徳沢へ。

2 日目は長堀尾根へ。腰までの雪と重荷でラッセルに苦闘しながら長堀山を越えた尾根上に TENT 設営。冬山の静寂、漆黒の夜空を思い出します。

3 日目は燕岳への縦走隊（平井さん、坂本さん、小竹）が蝶が岳小屋へ。翌日から猛烈な風・雪の悪天候に見舞われ 3 日～4 日間、小屋に閉じ込められて縦走を断念。サポート隊と合流して下山しています。

この山行には個人的な後日談があります。下山後 OB の在京連絡人から“親から安否を心配して電話があった。冬山は天候次第で下山が遅れることがあるのでよく説明しておくように”との注意があり、山行企画書を実家に送っていた私は、年末の帰省時に母に問い質したところ、母は家でラジオから流れる NHK ニュース（悪天候のため多くの登山パーティが下山できずにいる。その中で「早稲田大学山の会」の名前が報じられたとのこと。）をたまたま聞き、驚き心配のあまりに電話をしたとのことでした。

涸沢岳の山頂



長堀尾根のラッセル



冬の上高地



③RC会山行

9月のRC会山行には涸沢に三度入っていますが、何といっても忘れられないのは1974年の前穂高東壁での滑落事故です。近くの別ルートに登っていた私は、直ぐに現場に駆け付けたものの当人は負傷して動くことができずに、そのまま付き添う形でビバーク。翌日ヘリコプターで奥又白池から入った救助隊の方々に涸沢側から上高地まで降ろしていただき、事なきを得ました。

大事に至らず心から天に感謝したこと、山岳保険の有難さを実感したこと、普段は歩く横尾から上高地まで車で移動し“楽ちんだな”と不謹慎な感想を抱いたことなどが思い出されます。

もう一つの思い出は、1973年だったと思いますが滝谷へのアプローチで北穂沢に登っていると、早大山岳部のお二人が加藤文太郎もかくありなん(?)と思う速さで私たちを追い越していくのです。そのお一人が藪田さんでした。

今ではどうした経緯からかは判然としませんが、藪田さんのご好意により行方兄と私は下山するパーティと別れて徳澤園の冬季小屋(早大山岳部が貸し切りで使用)に一泊お世話になり、翌日雨で視界の悪い中を槍沢から槍ヶ岳へ、小屋で一泊。天候が回復した稜線を一気に、快適に燕岳まで踏破。中房温泉まで駆け下るも、途中で道の真ん中にとぐろを巻いている“蛇”を発見、二人とも急ブレーキをかけ慎重に迂回したハプニングもありました。

藪田さんは2015年1月、早大山岳部OBお二人とともに五竜岳遠見尾根で山スキー中に遭難され、5か月後に発見・収容されました。一期一会の出会いでした。

義弟と北穂高岳登頂



④おわりに

社会人になってからは2度穂高に登っています。2度目は1997年8月、当時は46歳、まだまだ体力には自信を持っていた頃です。義弟(福井大学ワングル部OB)と新穂高温泉まで自家用車で行き、バスで上高地へ。涸沢でテント泊、北穂高～涸沢岳～奥穂高～前穂高から重太郎新道を下り岳沢ヒュッテ付近でテント泊、上高地へ下山する2泊3日の山行でした。

最近、高校時代の山岳部OBと月に一度「吉峰寺」で坐禅した後、近隣の山々を楽しんでいます。

写真は、“西日本最大級のスキー場”(スキージャム勝山)が在る「法恩寺山」の頂上で撮った一枚です。(最もリフトを乗り継ぎ歩いたのは一時間弱でしたが。)足腰が多少はムリがきく間に、もう一度ゆっくりと上高地から涸沢へ入ってみたいと思います。



※ 本稿を記すにあたっては、会誌「やま14号」(1978年刊)に大いに助けられました。編集・発行に労を取られた倉本弘君、志知和彦君に改めて感謝申し上げます。

(2) 西穂～奥穂～氷河公園 (1986 年)

笠原 豊 (S40 年卒)

行程：上高地→西穂高→穂高岳→北穂高→南岳→氷河公園→槍沢→上高地

時期：1986. 7. 28～ 35 年前の写真が出てきたので報告します。 メンバー：笠原 豊 単独

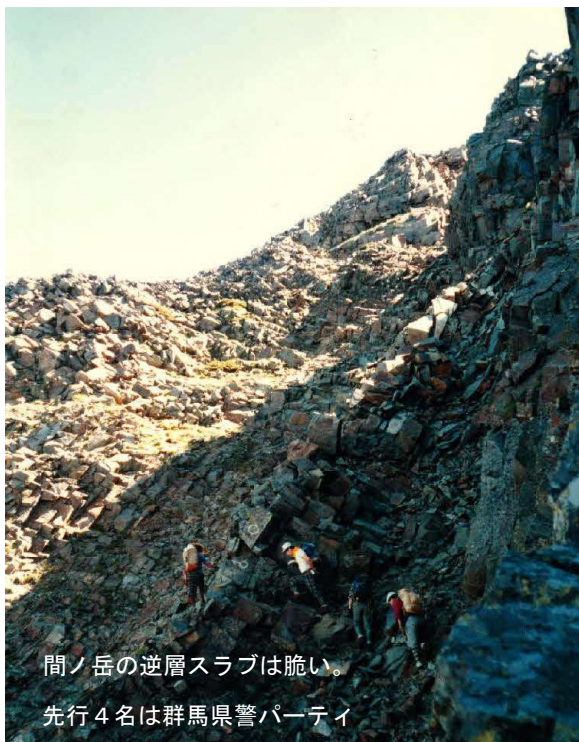
名古屋からの夜行列車を松本電鉄とバスに乗継いで上高地。西穂高山荘（現在は西穂山荘）へ登り、届けを済ませてテントを張って独標をピストンし、小屋へ寄って枝豆付ビールをジョッキで飲んだ。写真の山荘（1962 年建）は 1990 年に焼失して今はない。8mm ビデオを主に撮影したのでスチル写真は少ない。



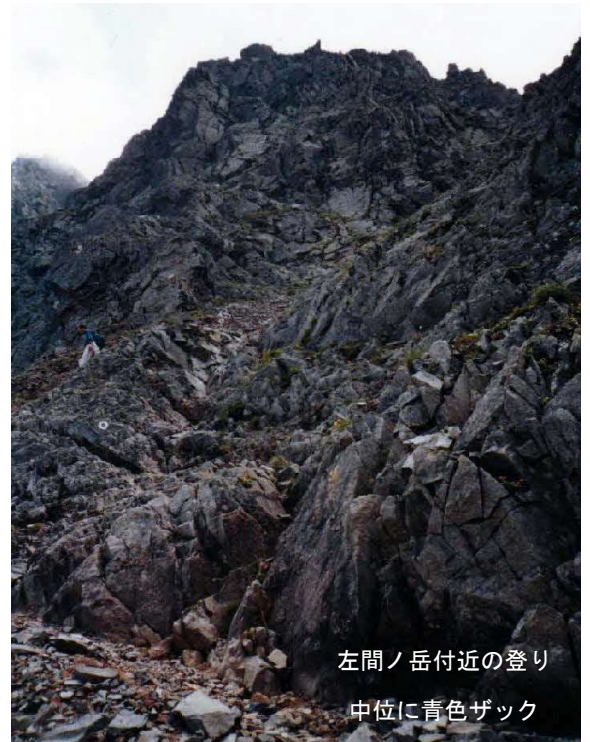
間ノ岳から天狗岳、豊岩ノ頭、 右へ前穂高岳吊尾根



西穂稜線から見た笠ヶ岳～抜戸～双六、遠景：黒部五郎岳



間ノ岳の逆層スラブは脆い。
先行 4 名は群馬県警パーティ



左間ノ岳付近の登り
中位に青色ザック

間ノ岳で群馬県警 P に追いつきしばし談話



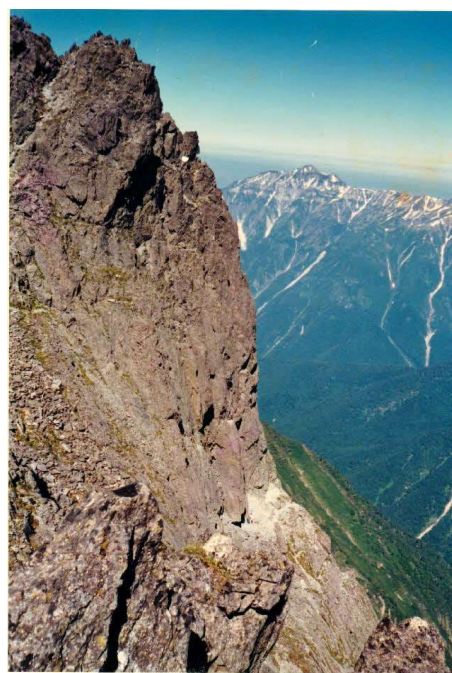
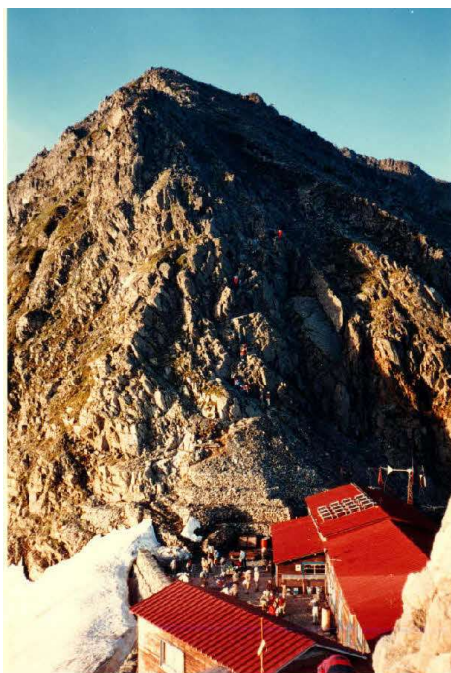
天狗コル 2830m 避難小屋跡崩れ、残雪有



天狗岳からコルへの最後で脚が届かず困った。コルからジャン 3163m まで高差 333m は東京タワーと同じで高い。

左図：天狗岳 2909m から奥穂へ。

右図：ジャンに登るとガスに巻かれた。尖ったロバの耳は歩けたが、「馬の背」は足で立てず、8mm カメラを腰にナイフリッジの刃に跨って登った。

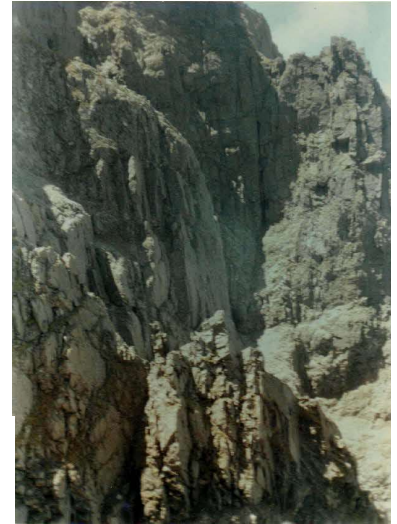


左図：穂高岳山荘前のテラスで群馬県警パーティから招かれて談話した。日航機御巢鷹山墜落の事故処理での苦労話を聞いた。うち1名とは交流が続き、日光白根山、武尊岳、赤城山などで再交流した（WMS-HP 掲載）。私はヘリポート上で独り幕営した。

右図：北穂高岳頂上付近からの滝谷ドーム北壁：基部に2人



左図：北穂頂から奥穂、馬の背、ロバの耳、ジャンダルム方面



右図：北穂高小屋からキレット方面に少し降りた滝谷上部。右奥P2フランケ、左端フェースが第1尾根。下方のゴツゴツ岩稜がクラック尾根

北穂高小屋から急降下し、飛騨泣き、長谷川ピークを越えて大切戸 2748mに下り、南岳 3033mへ登り返した。

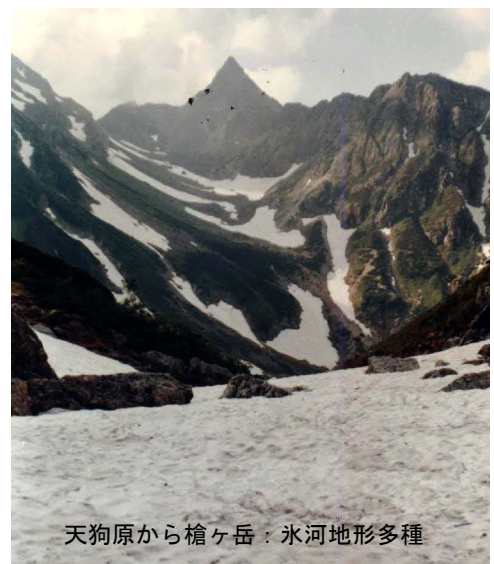


大切戸から獅子頭



横尾尾根から天狗原(氷河公園)と東鎌尾根

横尾尾根天狗原降口付近から横尾本谷右俣カールと屏風岩



天狗原から槍ヶ岳：氷河地形多種

8mm 撮影4本目を終えてババ平へ下った。66年に下った時には槍沢小屋があつて素泊まりしたがこの時には焼失後だったのでテント3泊となった。余談：山での火災をよく聞く。白馬山荘焼失後の建築現場で先輩たちと鬼ごっこをして遊んだのは山荘横で気象部の気象観測(幕営)中だった。また、正月に北沢峠で幕営していた時、隣のナイロンテントが一瞬のうちに燃えた。火の用心！

(3) 北鎌尾根の思い出

井上直斗 (R1年卒)

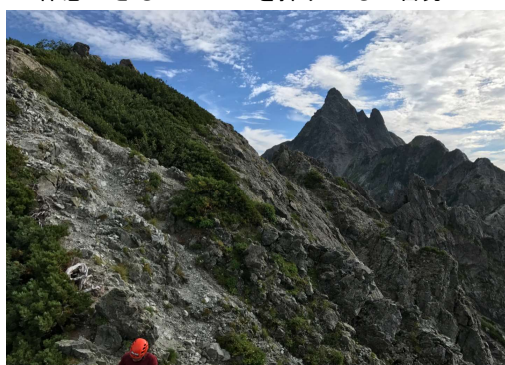
① 槍ヶ岳・北鎌尾根について

北アルプスの象徴の一つ、槍ヶ岳。その名前の通り、山頂が天に向かって貫く槍のような形をしていて、日本のマッターホルンと呼ばれている。通常は上高地から槍沢ロッジ経由か、新穂高からいくコースが一般的である。中房温泉方面から、表銀座コースで縦走するルートも人気だ。どれも人がよく通り、一般登山道として、ある程度は道が整備されている。

今回のテーマ「北鎌尾根」。それは北方から槍ヶ岳に至る岩稜帯の尾根である。整備された登山道ではなく、完全なバリエーションルートである。

北鎌尾根は難しいルートだ。理由は4つ。1つ目はルートファインディング力が求められること。バリエーションルートであり、岩稜帯が延々と続く。進む方向を間違えれば、今にも崩れ出しそうな地形の上に乗ってしまったり、クライムダウンが困難な岩についてしまうこともあり、戻ることも困難になる。2つ目は体力面。水俣乗越まで行き、一気に北鎌沢の出合いまで降

休息できるスペースを探すのも一苦労



り。そして槍ヶ岳まで高度を上げていく。そして道中は気を抜けない場所の連続。それを登攀具と水と食料（北鎌尾根に補給場所はない）を担いで歩き通さなければいけない。3つ目はクライミング要素である。ロープが必要になるのは2箇所くらいだが、それ以外にも気が抜けない岩場が続く。基本的な岩場への耐性は必須になる。4つ目は、エスケープルートがないこと。もし撤退するなら槍ヶ岳まで行くか、尾根を降りて再び水俣乗越までの急登を登り返さなければならない。

つまりは、登り切るかスタート地点まで戻るか、二択しかない。

そんな北鎌尾根、ずーっと憧れがあった。当時山の会で一緒に登っていた、一つ上の真藤先輩、同期の利藤も同じことを思っていたらしい。準備万端の夏休み、3人で北鎌尾根縦走を決行することに決めた。

② 北鎌尾根縦走 概要

日 程：2017年 8月24日（火）～28日（水）

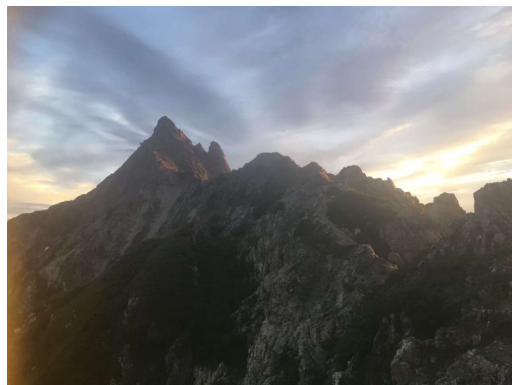
行 程：1日目：上高地～水俣乗越～北鎌沢の出合

2日目：北鎌沢の出合～北鎌のコル～独標～北鎌平

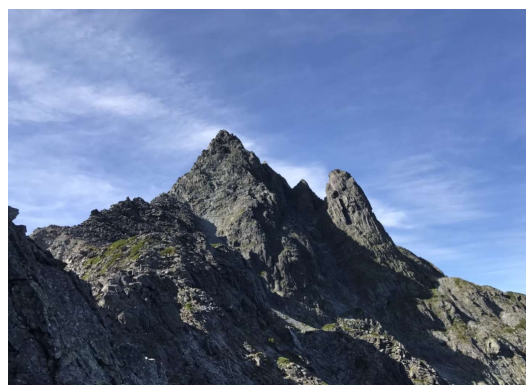
3日目：北鎌平～槍ヶ岳山頂～徳沢園

4日目：徳沢園～上高地

北鎌尾根から槍の穂先を眺める



大槍（頂上）と小槍



メンバー：真藤幸暉、利藤暢、井上直斗

1 日目は雨だった。槍沢ロッジ辺りで雨が本降りになってきた記憶がある。水俣乗越に到着して、よく見ると微かに踏み跡のようなものが。北鎌沢の出合まで降りる道だ。これからいよいよバリエーションルートの始まりかと、高揚感を抑えるのに苦労したが、すぐに高揚感よりもきついという感情が勝る。途中踏み跡がなくなり、崩落箇所もありルート取りに苦労した。さらに大雨+急な土の斜面で、まともに歩くのが難しい。降り切ったら、雪渓が残っていたのでアイゼン装着して渡る。北鎌沢の出合いを発見し、幕営。

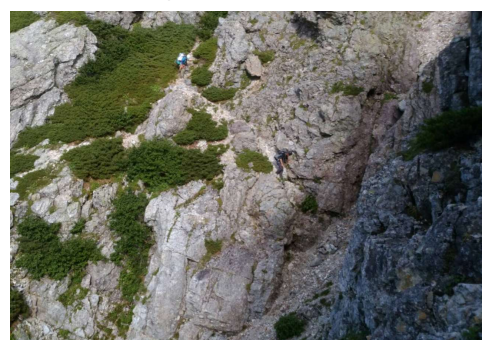
北鎌三銃士の雄姿



雪渓に阻まれる

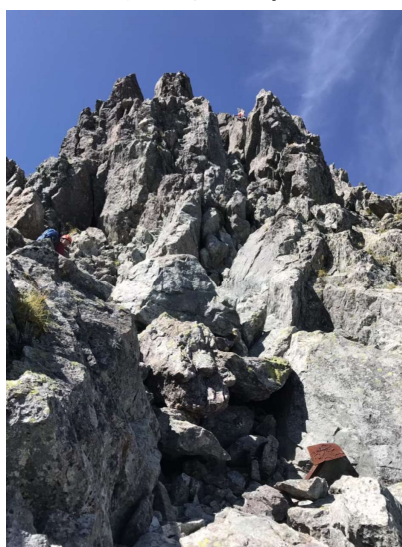


痺れたトラバース



2 日目は晴天。北鎌沢をひたすら尾根に突き上げるまで登る。前日の大雨で増水しており、もはや沢登りだった。途中1箇所、大岩を越えなければならず、大ザックを背負って越えるのは苦労した。北鎌のコルに到着し、いよいよ北鎌尾根上に到着。気を抜けない岩峰帯が延々と続く。ここは大丈夫と思って足をかけたら、岩が崩壊することもある。ルーファイが非常に重要。慎重に進む。途中、大岩を越える際にロープを出そうか迷うが、支点がない。空身で1人が先に上がり、腰がらみで引き上げる。ザックの重さが辛い。2 日目で一番痺れたのは、独標（北鎌上のピークの一つ）を巻いた時だ。ガラガラ崩れそうな急なトラバースを強いられる。アドレナリン全開でトラバースをやり過ごして、少し進むとテント一個分の幕営適地があった為、10 時間くらいにもわたる行動終了。

頂上手前の登攀



3 日目は、だんだんと近付いてくる槍をたまに見つつも、しっかりと足元に集中し続ける。北鎌尾根から見る槍ヶ岳は、どこか不気味な姿だ。上高地方面から見る、天を貫く壮観な槍ではなく、ゴツゴツが混ざり合ったような得体の知れないものに見える。ルートファインディングに苦労しつつも、無事に穂先の麓まで来た。穂先直前の登攀が、ガレと崩れ落ちる岩で、なかなか痺れた。ここでロープを出すのが一般的らしい。夢中で登攀していると、急に前方が開ける。あれ？ 人の声がする？ と思って頭をひょこっと飛び出すと、槍の穂先だった。

頂上から辿ってきた北鎌尾根が見えた。あんなところ、とても歩ける場所だとは思わない。でも本当に歩いて登れたんだと、改めて達成感に満たされた。

(4) 穂高の単独山行と紅葉

岡田瑞紀 (R3 年卒)

日 程 : 2020 年 10 月 6 日 (火) ~ 7 日 (水)

山 域 : 前穂高岳・奥穂高岳・涸沢

メンバー : 岡田瑞紀 単独

奥穂高岳の山頂にて ➡



① 上高地から岳沢小屋へ

朝 5:30 上高地を出発。秋頃の北アルプスの早朝は肌寒い。

多くの登山者が横尾へ向かって歩き出す中、河童橋を渡って一人岳沢へ向かった。日の出の時間を過ぎても樹林帯の中は薄暗い。しかし 30 分も歩くと朝日が昇り、薄暗闇だった森林に温かい光が差し込む。さらに歩を進めると、秋の岳沢名所・天然クーラーの風穴が姿を現した。小さな穴から涼しい風が吹き込む。しかし 10 月の気温には少し寒く感じるくらいだ。行動開始から 2 時間。岳沢小屋に到着。背後に聳えるジャンダルムがあまりにもカッコいい。少し感傷に浸った後、前穂高岳に向かって岳沢小屋を後にした。

前穂高岳山頂から



② 重太郎新道を経て前穂高岳へ

少しずつ岩場が出てくる。群馬の群発地震の影響で山道が崩れているという情報を聞いていたが、既に整備されていたようだ。(初めてのコースであったため正確には分からないが、下山途中で話した方によると地震発生後はそれなりに崩落していたらしい) 梯子、急な岩場、鎖場を身体全体を使いながら登る。無我夢中になって登っていたら、いつの間にか紀美子平 に到着。荷物をデポして前穂高岳へ向かった。

山頂は言葉に出ない程の絶景。ジャンダルムから槍ヶ岳、燕岳、立山連峰まで見渡すことができた。また足元を見下ろすと赤・黄・橙と暖色に染まった山肌も。雨女の私からすると、言葉を失うくらいの絶景であった。歓喜の声を漏らしそうになったが、喉の奥にしまい込む。少し休憩したら前穂高岳を後にして、吊尾根に向かった。

奥穂高岳山頂から



③ 吊尾根を経て奥穂高岳へ

奥穂高岳を目の前に、ただひたすらと尾根沿いを歩く。時に岩場を登り、鎖場を越えていく。山頂の手前で恐らく吊尾根の核心部分に出会う。少し長めの岩場になっている。もうここまでくると楽しさしかなかった。

疲れはなく、ただひたすらに足と手の置き場を丁寧に確認しながら登る。そして 13:30。奥穂高岳山頂に到着した。背後からジャンダルムの圧。そして天使が小さく見える。

④奥穂高岳から穂高岳山荘へ

少し山頂でまったりした後は、初日の宿でもある穂高岳山荘へ向かった。続々と山頂へ向かう人々と、鎖場や梯子で気を付けてすれ違う。そして
14:30、穂高岳山荘に到着。

穂高岳山荘からの日の入り



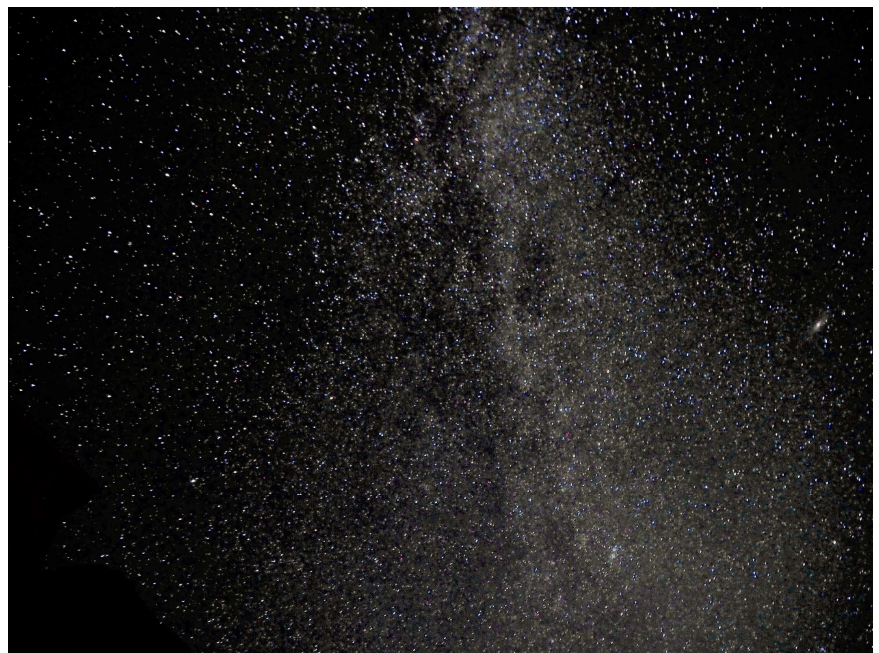
⑤穂高岳山荘での出来事

テント場の受付をして自分の寝床を確保する。
そして一通りの準備が済んだら、テラスで『ホットココア』を一杯。絶景を眺めながら、「ほっ」とため息。一日の疲れが一気に吹っ飛ぶ。前穂高岳、奥穂高岳。自分が歩いてきた道のりを眺めた。次に、足元に広がる涸沢の紅葉を。そして今度は奥に立ちはだかる、燕岳、大天井岳、常念岳を。ふと、山の会のメンバーと北アルプス全山縦走した日のことを思い出す。「来年こそは、ジャンダルムに。」「北鎌尾根もいいなあ」「涸沢ベースで奥穂南稜、前穂北尾根アタックもいいなあ」なんていろんな妄想を膨らませながら、一日の疲れを癒していく。これこそ私の山の醍醐味の一つである。

事件は何の予兆もなく起こった。テラスで一服している私の目の前で、滑落事故が発生。奥穂高岳山頂から下山してきて、穂高岳山荘手前の鎖場で足を踏み外したらしい。一瞬の悲鳴の後、周囲に緊張が走った。すぐに山小屋で救助体制が整えられ、救助に向かった。不幸中の幸いなのか、滑落した方向が涸沢方面ではなく、西穂高方面であったため、岩場に身体が引っ掛かり、滑落幅は小さく済んだ。大きな怪我もなく、無事に救助された。初めて滑落現場を目の当たりにした私は、改めて山の怖さを思い出した。十分な体力、危機察知能力、強固な精神、豊富な知識量、正確で冷静な判断力、そして技術力。登山をするうえでは、これら全てが備わっている必要があるのだ。

穂高岳山荘にて（星空）

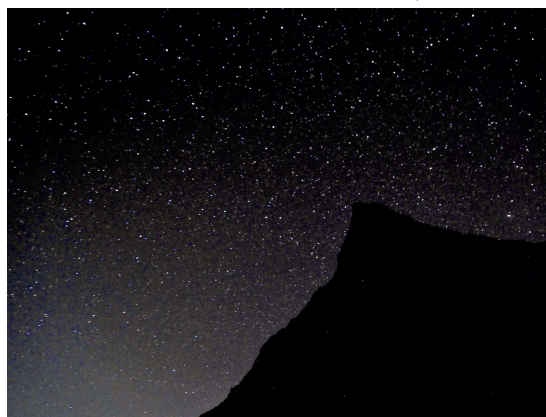
秋の銀河、中央右端にアンドロメダ大星雲、銀河の下方にペルセウス二重星団が見える



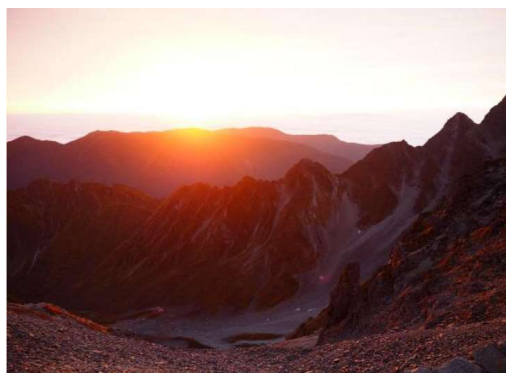
夜になると、そこには満天の星空が広がる。月明かりがない分、星空が暗闇を照らしてくれていた。肉眼でも天の川が見え、無数の星光が心を穏やかにしてくれる。が、この時間帯は『いか

に綺麗な写真を撮れるのか』が、本来の私の戦である。肌寒い中、カメラと携帯、グローブを片手にベストポジションを探しに行く。ベストポジションを見つけたらカメラの設定調整をして、シャッターを切る。シャッターを切っては、設定を変え、場所を変え、またシャッターを切る。自分の満足のいく写真を撮るまで、ただひたすらにこの作業を繰り返す。満足がいく頃には、寒さが襲ってくるため、暖を取りに自分のテントに戻って次の日に備えた。

穂高岳山荘にて（奥穂高岳）



穂高岳山荘からの日の出



⑥穂高岳山荘から涸沢へ

今朝。テントからむくむく起き出し、「寒いなあ。シュラフから出たくないなあ」なんて思いながら、朝ごはんの用意をした。そして出発前に、日の出を拝む。これが『世界に明かりが灯る瞬間』。テントの撤収も行い、5:50 に穂高岳山荘を後にした。

ザイテングラート経由で涸沢ヒュッテへと向かう。

目的地が直下に見えている分、足取りは軽かった。ザ

イテングラートは多少霜が降っていた。岩場が白みがかかり、雪の結晶も見受けられた。そして徐々に、紅葉の赤色の世界に足を踏み入れる。7:19 涸沢ヒュッテに到着。背後には、赤・黄・橙・茶のグラデーションが広がっていた。

初めての涸沢の紅葉。山の先輩方からは、「数年前の紅葉の方が断然きれいで、今年はそうではない」と伺っていたが、確かに赤色は少ない。

それでも綺麗であることには変わりなく、私にとっては圧巻の景色であった。売店でまた『ホットコ コア』を飲みながら、一服。今年はコロナの関係もあり、小屋の宿泊人数の制限、バスの運行本数の減少があったため、例年よりも人数が少ない。テントの数は少なく、ネットで調べていたよりも、テント間に隙間があった。なんだかんだゆっくりした後、7:50 に涸沢ヒュッテを後にして、帰路へと歩んだ。

涸沢ヒュッテから



⑦上高地へ帰路を歩む

「温泉に入るために」「おいしいご飯を食べるために」この一心で下山する。本谷橋に8:50 に到着し、川で少しだけ水浴びをする。汗をかいた顔を冷たくて綺麗な水で洗い流す。非常に気持ちいい。本谷橋を出て、横尾・徳沢・明神と進み、12:00 に上高地バスターミナルに到着。帰宅のバスまで 3 時間ほどあるため、温泉に入ってから美味しいリンゴパイを食べた。

投稿 1：自分にとっての百名山

大国恒雄 (S33 年卒)

きっかけは父だった。父は富士山にずっと登りたいと思いつつ、実現できずにいた。私は学生時代に山の会で活動していたので、父が還暦を迎えたときに妻も伴い、一緒に登った。もう今生での実現を半ばあきらめていた父がとても喜んでいてことを思い出す。

それから、若い頃に印象に残っていた山に妻と一緒に登るようになった。30 年位登り続けていて、それらの山が深田久弥の百名山と 75 座くらい重なっていることに気づき、妻の還暦までに百名山を踏破してみようかということになった。

それが私の百名山経験だ。

幌尻岳では沢を渡るために地下足袋を買いに行った。店員さんに「もう地下足袋は取り扱いません」と言われ、渡沢専用の靴を大枚叩いて買う羽目になった。22 か所の渡渉を無事に支えてからは、次なる活躍に備えて家に飾られている。

北岳では、食当など山の会の後輩たちにサポートしてもらって登った。三人娘の一番下はまだ幼稚園児だった。もしかしたら当時、北岳に登った最年少記録だったのではないかと考えている。広河原から北岳に登り、下山中、沢筋で小豆の缶詰と残雪を一緒に食べる氷ぜんざいを子どもたちが美味しいと言って喜んで食べていたのを覚えている。

塩見岳ではリュックを山小屋近くに置いて山頂を目指したが、あいにく雨にふられた。戻ってみるとリュックがない。慌てて探すと、塩見小屋のひとが荷物が濡れないように小屋の中に避難させてくれていた。疲れが一気に吹き飛び、妻はるるん。その後の三伏峠小屋の天麩羅のおいしさにも感激していた。

このように山小屋も登山には欠かせないものだ。雨のなかで登った笠岳の小屋は、妻には高級ホテルに思えたようで、しっかりとした佇まいは、頂上を行き来する心を安らかにさせた。

聖岳の山小屋では4年ほど、山の会の後輩が「オヤジ」をしていたことがある。私たちが登ったときにもその旧山小屋は頂上直下に現存していた。中に入ると、夜中にちょろちょろ動くネズミを嬉しそうに眺めたり、単独行の登山客の話しにじっくり耳を傾けたりしている、後輩の「山小屋のオヤジ」姿が浮かんできた。

私の考える山登りというのは、より高き、より険しきを目指すものではない。人と競争するものではなく、山のおいたちや植生など自然と対話、いわば山と対峙するものだと思う。深田久弥の百名山をピーク・ハントすればよしというのではなく、自分にとっての百名山を見出すことが肝要なのだ。

自分が納得し、自分が魅力を感じるのが本来の山登りだとするこの考えを実践するために、今では、著名ではなくても、各地方の伝えられている伝説や昔話が面白い山や特徴ある植生・地質を持っていて心惹かれる山の山登りをしている。

槍ヶ岳山頂にて(1988 年 8 月 14 日)



北岳山頂にて(1978 年 8 月 15 日)



投稿 2 : アンデスからアマゾンへ

— 本当のアマゾン探検 —

豊田紳二 (S47 年卒)

①アンデス遠征

1973 年、早稲田大学アンデス縦断登山隊に参加。山の会の OB 主体で計 8 名。ベネズエラのメリダ山群で 6 月から 2 週間近い登攀活動を行い、同国の最高峰のボリバル峰 (Pico Bolivar 5007m) に南西壁から登頂。帰途、エル・トロ峰 (El Toro 4755m) 登頂。

9 月、コロンビア東部のコクイ山群で 20 日間の登攀活動。プルピト峰 (Pulpito 5220m) 及びコンカボ峰 (Concavo 5174m)、パンデアスーカル峰 (Pan de Azucar 5085m) に登頂。



②語学遊学・スペイン語

コロンビア・エクアドル国境付近で自動車事故の為に遠征を中止、エクアドルの首都キトで現地解散。借りていたトヨタのランドクルーザー等の機材をペルーのカヤオ港から日本に送り返す。

1974 年 2 月、リマのペルー北米文化学院スペイン語学科に入学。スペイン語は 8 コースあり、最短 8 ヶ月で卒業可能だが、学生が集まらずに休講になる月もある。結局、翌年の 1 月に卒業。遊学中にアマゾン河を訪れる機会がやってくる。監督とカメラマンの 2 名からなる日本の TV の撮影隊から、アマゾン河への同行・通訳を依頼される。



③アマゾン河へ

1974 年 9 月から 10 月にかけて約二週間、アマゾンの上流域、ペルーのプカルパ (Pucallpa) という町を拠点に現地取材。アマゾンはこの地域ではウカヤリ川 (Ucayali) と呼ばれている。乾季で、川幅は 200 ～ 300 メートル。地元のインディオを雇って、前半はプカルパからカヌーで半日下った川岸にテントを張り、ワニやイルカ、カビパラなどの狩りを撮影。

④イルカ狩り

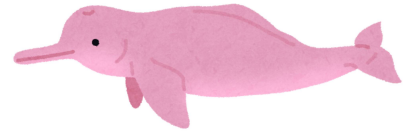
監督の頭の中の話は、狩りに出かけたインディオがイルカを捕っての帰途、ピラニアに食べられてしまうという、ヘミングウェイの「老人と海」のようなストーリー。

ところが、地元の人達はイルカの肉は臭いがひどく、まずくて食べないと言っている。我々が頼んだインディオはイルカ狩りをしたことは無いそうで、無理に頼んで狩りをして貰う。初日は一匹も捕れず。

二日目に数匹のイルカの群れを認める。銚が一匹に命中。初めは、銚にロープでつながれた大きな浮きをぐいぐい引っ張りながら潜って行くが、次第に弱まり、動かなくなる。この間、捕まったイルカを心配した 2 ～ 3 匹の仲間が我々を遠巻きにして泳いでいる。今回のロケで一番

切ないシーン。

インディオ達はカヌーを沈め、イルカを入れた後にカヌーの水を掻き出して出発の準備完了。これでは絵にならないと監督が言うので、カヌーの脇にイルカを縛って貰う。



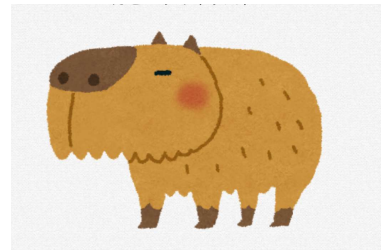
撮影終了後、あらためてカヌーの中にイルカを積み込んで移動。ピラニアのいる川にイルカを入れると、寄ってきたピラニアもほんのちょっとだけ肉をつつついただけで、直ぐに食べるのを止めてしまう。イルカの肉は余程まずいのだろう。

⑤未開の裸族

3 日目、この付近では比較的未開と言われているシピーボ(Los Shipibos)というインディオの部落を尋ねる。実際に行ってみると、未開どころかスレていて問題外。大きな屋根のある集会所のような機織り所にはミシンもある。大人は皆、上下洋服を着ていて タイヤから作ったゴム草履などを履いている。金さえ払えば裸にもなると言っている。子供達が大勢集まって来るが、上半身裸で裸足の子供もいるが数は少ない。ミシンを隠して貰い、女性達には上半身裸になってもらう。男性達にはシャツを着替えて貰って撮影。

⑥カピバラ狩り

4 日目、カピバラ狩り。この狩りは犬が全てやってくれる。犬に追い詰められて動かなくなったカピバラを最後に人間が縄でくくるだけ。時間はかかったが簡単に捕まえてしまったので、カピバラを放してもう一度撮影しようとするが、カピバラも犬もバテてしまって全然お話にならず。ネズミをそのまま大きくしたようなカピバラは体長が1メートルを超え、前歯が大きくて危険。鳴き声は「チューチュー」とネズミそのもの。

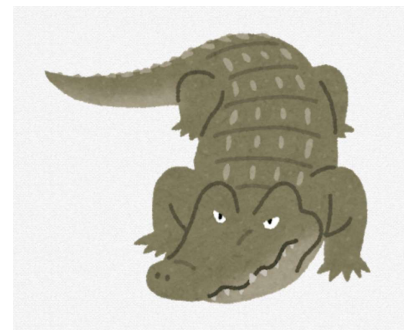


必死に逃げるカピバラを追いかける犬、その後を追いかけるインディオ、続いてカメラマン、その後に監督と私。灌木や湿地のセルバ(Selva、ジャングルのこと)を右往左往。当時のバッテリーなどの機材は重くて大変な重労働も懐かしい思い出。

⑦ワニ狩り

5～6 日目。この2週間で一番まともな2日間。本流はワニが少ないので、セルバに道を作りながらワニの棲息する湖まで、半日ばかりでカヌーや荷物を運ぶ。

夜、湖で狩りをする。カヌーに乗り、懐中電灯で水面を照らすとワニや他の動物の目が赤く光る。水面からの高さや両目の間隔からワニの大きさが分るらしい。モリで2匹捕った。190cm と 170cm 位。



早速、ワニの肉を刺身で食べたが、これは最高に美味しい。この近辺でも普段、人間を襲うワニは殆どいなくて、逆に人間を見るとワニの方が逃げてしまうらしい。

⑧精悍なインディオ

狩りを依頼したのはプカルパの郊外に住む Gonzalez 氏。30 歳位の精悍なインディオ。アマゾンのセルバを歩く時にはマチェーテ(長さ 50cm 位の山刀)が必需品で、灌木や樹木の枝を切り払いながら進む。道も無く、何の目印も無いセルバを歩いたり、走ったりしても迷うことがない。太陽の位置から、現在地を把握する”超能力”の持ち主。

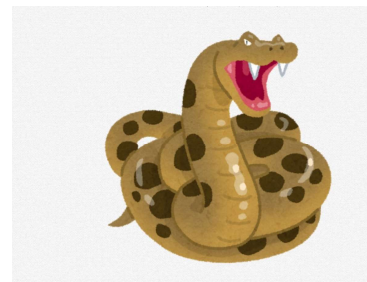
ある夜、月を見ながら Gonzalez 氏、「月は見えるけど、日本は見えないから余程遠いのだね」

ある夕方、遠くに雨雲が見え、雨雲の下はスコール。Gonzalez 氏「日本でも雨が降るのか?」、私「もちろん降るよ」、Gonzalez 氏「ここからは見えない程遠い日本まであの雨雲が行くのか?!」。

⑨アナコンダ

プカルパの町に戻り、郊外にアナコンダがいるというので訪ねる。大蛇の共食いが監督の頭の中の中の脚本か。

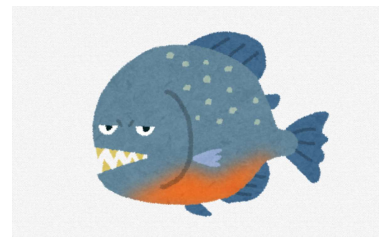
飼い主に 2 匹の大蛇(大きい方は 4~5m、小さい方は 2~3m)を広場に連れ出して貰う。監督が共食いをさせてくれと頼むが 2 匹とも殆ど動かない。蛇は夜行性で昼間は寝て暮らす。起こそうとして頭を叩くと一瞬口を大きく開けて怒るが直ぐに寝てしまう。



鶏を襲うシーンを撮ろうと、ケージの中に大蛇と鶏を一緒に入れるが相変わらず寝たきりで撮影にならない。後で聞くと、翌朝、鶏の姿は見え、大蛇のお腹が膨れていたとのこと。

⑩ピラニア

ピラニアが沢山いるという支流を訪れる。体に傷が無くて血さえ出ていなければピラニアは害を与えないと、インディオの子供達は平気で泳いでいる。豚肉を餌にする。普通の釣りとは逆で、水面を釣り竿でかき混ぜる音でピラニアを呼び寄せると直ぐに釣れる。



その場で刺身にしてレモンを付けて食べると、地元のインディオ達に「!Que barbaro!(!何て野蛮なんだ!)」と言って驚かれる。

⑪その後

このアマゾン探検の様子は、1974 年末に NET(当時の 12 チャンネル)の「金曜スペシャル」で放映され、久しぶりに私の姿を画面で見た日本の家族が喜んでくれました。

監督の希望するシーンが撮れないこともあったが、どのような番組に仕上がったのだろうか。一度見てみたかったのですが……。

首都のリマに戻り、監督は帰国しました。残った赤松カメラマンと私の二人でペルーアンデスにコンドル狩りの撮影に行きました。また機会があればこの狩りの様子をお話したいと思います。

※ 後年、門田龍太郎監督と赤松威善カメラマンは、名画「白き氷河の果てに」を製作します。

【COLUMN】

治療される側から見たピンコロ人生 進健康管理法その2

廣瀬舜一 (S38 年卒)

2. 生活者としての自己の身体を全体的把握で考えた、病気と健康についての一考察

(1) 健康を全うしてこそ、身体と心、頭脳の3分野の健康人生が完遂できるのです。

- ① 身体の健康
 - ㊦血流と血液検査に基づく血管の健康管理
 - ㊧呼吸の調整…深呼吸で身体のすみずみまで酸素を送り、細胞を活性化する。
 - ㊨適量の食事によるエネルギー代謝の調整
 - ㊩過剰な刺激を避け、自律神経を整え、内臓の働きに負担を掛けない。
- ② 心の健康
 - ㊦生かされているありがたさに気付くと共に、感謝することの多さに気付く。
 - ㊧無財の七施の実践…マイナス感情から解放され生命が活動しやすい状態を作り出す。
 - ㊨感謝・利他心を持って、明るく前向きで向上心や挑戦心を忘れない
「ありがとう」の言葉を何気ないことにも1日10回使いましょう
- ③ 頭脳の健康…読み書き算盤をやり続けましょう。
 - ㊦読む…新たにものを吸収する食欲さを失わない。
 - ㊧書く…手で書いて文章をまとめる（調べる、考える、まとめる）＝書く
 - ㊨儲かる、継続できるやり方を考える…たとえボランティアであっても。

(2) 現代医学とそれ以外の治療との違いを知って、各々の良さを生かす「良いとこ取り」をやりましょう。そして自分の健康は自分で創る。お医者さんに抱きつかないようにしましょう。

- ① 現代医学の考え方と特色…患部に焦点を当てた対症療法＝クスリと手術が得意です。
 - 強み…感染症、患部の発見、外科手術、急性病、薬の開発には best
 - 弱み…㊦生活習慣病の決め手を欠く・生活指導を本気でやらずに薬依存が多い。
 - ㊧病気の原因の追究と患者への説明が不足
 - ㊨診療で見落としている部分が存在する…未病の症状への対策がない。
- ② 東洋医学の考え方と特色…日本で発達した漢方、鍼灸などの民間療法。
 - 病気とは身体のバランスが崩れたことが原因で、身体の弱い部位が病気になる。
 - その原因は過食、過飲、使い過ぎ、過度の疲れ、自律神経やエネルギーの代謝の乱れ
 - 強み…生活習慣病や体質改善に強み
 - 弱み…㊦病気の発見と急性病、感染症、手術には無力
 - ㊧全体のバランスとは、身体の状態（自律神経、エネルギー代謝〈まだ西洋医学で研究と対策が進んでいない部分〉、免疫関係、血流等の乱れ）を把握し、健康・未病・病気の3種分類で対応すること
- ③ 特に生活習慣病に多発する未病への対応…西洋医学では未病レベルは病気に入りません。患者はなんだか具合が悪くて不愉快、五臓六腑の半病人状態が調和の乱れ。自動車に例えれば、エンジン 300・500 回転の状態では車は動きません。
 - 身体の部位や臓器の健康、特に腸内健康、血流や呼吸の仕方に注目して、肝臓、腎臓と腸と脾臓その他臓器の調和とバランスのとれた生活をしましょう。

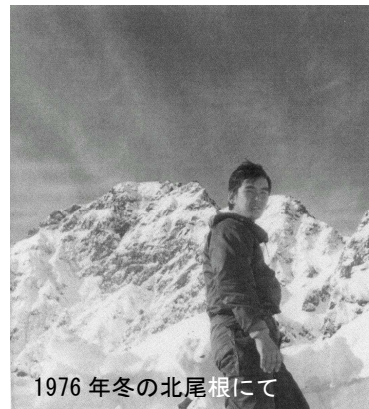
(つづく)



【編集後記】

我が国のアルピニズムのメッカ穂高連峰は、私が登山を始めた高校生のときからの憧れの山でした。初めて上高地から穂高に足を踏み入れたのは18才の5月。涸沢の彼方に聳える残雪を纏った北尾根、奥穂高岳など荒々しい雪と岩の塊、そして奥穂高のピークから見た真っ黒な巨神兵のようなジャンダルム。穂高連峰の光の中に潜む危険なフォースを感じて背中の一部がゾクッとしました。

早稲田大学に入っても何の希望もなかった私の青春の扉が開かれたのです。そして、三号館にあった早大山の会の部室のドアを叩きました。恋も勉強もしないで穂高連峰の北尾根、滝谷、奥又白、屏風岩と先人たちが挑戦してきた岩場に何度かよったことか。遭難があるたびに、こんどは自分の番かもしれないと怯えながらザイルやアイゼンやピッケルを担いで、上高地から涸沢への道を春夏秋冬歩いたけど、結局アルプスやヒマラヤへの夢はかないませんでした。



1976年冬の北尾根にて

齢(よわい)65歳を越えて、再度、アルプスのモンブランを目指してクライミングジムでトレーニング中にグランドフォール、夢は都会の遭難であえなく潰れてしまいました。

上高地は天獄への門なのだろうか？ 穂高はもう眺めるだけの山になってしまったけれど、上高地に行くといつも背中の一部が冷やっとなります。

さて、稲山会通信第43号の内容は豊富。巻頭言は副代表の常数OBの「La vie est belle」特集Ⅰは、2020年度山の会のオンライン総会です。

そして特集Ⅱは、槍ヶ岳・穂高連峰特集で、素晴らしい文章だけでなく、今回は素晴らしい写真もたくさんいただきました。はじめに、小竹OBが書いた“穂高の思い出”は私の思い出と重なり、加藤文太郎の挑戦した槍ヶ岳北鎌尾根は、当時雪や岩で研鑽した岳人たちの憧れの対象で、若き井上OBが2017年の北鎌尾根縦走の記録を書いてくれました。

トップ頁の写真は新緑の上高地。8頁は斉藤OBの佐久平からの穂高連峰はポカラから遠望するヒマラヤのように神々しく、笠原OBの迫力満点の穂高の写真、殊に霧の中に聳えるジャンダルムはドロミテかパタゴニアの大岩峰を想起させ圧倒的です。また、社会人となった岡田OGのように穂高で星空を撮影しようとした者は彼女以外にはいません、奥穂の影と、いまにも回り出そうとする銀河(星空)がまるで万華鏡のようです。

大先輩の大国OBからは、自分にとっての「百名山」を見出すことが肝要、豊田OBの爆笑ものの「本当のアマゾン探検」。シンガリは第42号に引き続き廣瀬OBの「ピンコロ人生の健康管理」という高齢者の生き方について投稿していただきました。いずれのOBも山登りだけでなく“これぞワセダ”というユニークな生き方をされていて、脱帽。山以外でも稲門山の会の“人間力”って凄いですね。

今回のテーマは「南アルプス」。自薦他薦の投稿お待ちしております。行方正幸(S50年卒)記

最後に、会費納入がまだ済んでいない会員の皆さん♡

会費の納入よろしくお願ひいたします。